

犯罪被害者等の手記

第4集



秋 田 県
秋 田 県 警 察
(公社)秋田被害者支援センター
秋 田 地 区 交 通 安 全 協 会

はじめに

犯罪被害者等の手記は、平成十九年に第1集、二十二年に第2集、二十六年に第3集を作成し、犯罪の被害に遭われた方やそのご遺族の思いを届けて参りました。

この度の「犯罪被害者等の手記第4集」には、交通死亡事故被害者遺族、交通事故被害者、性犯罪被害者、九人の方が寄稿してくださいました。

手記には、突然の被害による混乱、家族を失ったことの悲しみ、未来への絶望などが痛切に綴られています。しかし、それは、犯罪被害者等が経験したほんの一握りに過ぎません。書面に記すことの出来なかった見えない心情にも、思いをはせていただきたいと思います。

平成二十八年には、「第3次秋田県犯罪被害者等支援基本計画」を策定し、犯罪の被害に遭われた方々を温かく支える地域社会の形成を図っております。犯罪被害者等の支援は、その思いを知ることはじまりです。この手記を手につけた県民の皆様が、改めて一人一人の命の重さを感じ、犯罪被害者支援の輪が広がることを願って止みません。

最後に、手記を綴るために被害体験に向き合い、私たちの想像を絶する辛さを抱えながらも、寄稿してくださった九人の皆様に対して、心から敬意と感謝を申し上げます。

※手記は原文のまま掲載しております。

平成三十年十一月

秋 田 県 警 察 局
秋 田 県 警 察 局
(公社)秋田被害者支援センター
秋田地区交通安全協会

目次

一	あの日に戻りたい	藤村恵子	1
二	無念	佐川宏	6
三	大切な日常	上杉芳則・春美	11
四	二年前の交通事故の経験から考えること ↳七十五歳男性へ(現在七十七歳 貴方は犯罪者です)	匿名	14
五	変わらぬ想い	熊谷文子	18
六	支え合い、折り合いをつけて生きる	三浦芳子	25
七	精神疾患と共に十年、そして、これから ↳被害者遺族が経験する精神疾患の一例	匿名	28
八	また夏がきて ↳還暦を迎えて共に生きる	小川トシエ	32
九	それでも明日を生きる	安部有紀	42



イラスト 泉 牧子

あの日に戻りたい

藤村 恵子

二人姉妹のたった一人の最愛の姉を、平成二十八年十月二十一日に身勝手な加害者によって命を奪われました。当日の朝、いつものように「行つて来ます」と元気に仕事に出掛けた姉が、たった一時間後に事故に遭いました。

三時間四十分後、姉は搬送先の病院で息を引き取りました。医師からは、手の施しようが無かったと言われたそうです。頭蓋骨骨折、頸椎骨折、右肋骨全骨折、右腕骨折、右大腿骨骨折、肋骨は内臓に刺さり込んでいたそうです。姉は出血多量で意識が無い中も、両親と私の到着を待ち、必死に戦っていたのだと思います。私は急いで秋田に向かいましたが、両親も私も姉の最期を看取る事すらできませんでした。

変わり果てた姉が、病室のベッドに横たわ

っていました。頭は膨らみ手足には包帯が巻かれていて、大怪我を負った痛々しさが伝わってきました。私は、姉の手を取り「痛かったね」と言い泣き崩れました。

あまりに突然の出来事に、姉の死を受け入れる事は全くできませんでした。起き上がっていないものように笑顔で話しかけてくれるのではないかと思いました。

当日、姉は出張で岩手に向かう途中、後部座席にシートベルトの設置が無い貨物自動車です事故に遭いました。加害者が長時間の前方不注意で対向車線に進入し逆走して、ブレーキを一切かけず、猛スピードで大型トラックと正面衝突し、車両を大破させました。大型トラックを運転していた方が、急ブレー

キをかけたにも関わらず、加害者は速度を落とす事なく衝突させました。衝突された大型トラックを運転されていた方も怪我を負わせられ、十三トントラックが廃車になったそうです。姉の頑丈なキャリーバッグは潰れ、中の荷物は全て破損し、姉が持っていたストーリーは血で染まっていました。

その日を境に、私達家族の人生が一変しました。姉が居る、姉と過ごすという今まで当たり前だった幸せを奪われ、人生のどん底に突き落とされました。姉が居ない人生は考えられませんでした。悪い夢ではないのか、なぜ姉は帰って来ないのか、心の整理がつきませんでした。両親は、手の震えや半身の麻痺、声が出なくなる等身体の不調が今も続いています。私も胃腸の不調が続き今も通院しています。

姉は穏やかで、いつも笑顔を絶やしませんでした。几帳面で慎重ですが、決めるとすぐ

行動する頼もしさもありました。勉強熱心で、何でも知っていて、何でも出来る姉を私はいつも頼っていました。料理が得意な姉は、美味しい料理やパンやケーキをよく作ってくれました。焼きたてのパンとケーキを両親と私はとても楽しみにしていました。

アナウンスの仕事が大好きな姉は、毎日、発声練習や情報収集を行い、外出する際は喉を守る為にマスクを着用し、体型維持の為に筋トレをする等、努力を怠らず常に健康に気を付けていました。そのストイック過ぎる程に努力を惜しまない姿には、家族ながらも感心させられていました。

仕事もプライベートでも、まだまだやりたい事、目標がたくさんある姉でした。人生半ばで突然命を奪われ、どれだけ無念だったでしょう。姉が居てくれたらと日々思いいます。姉妹を見掛けると、なぜ私の姉は居ないのかと胸が張り裂けそうになります。

姉は、健康には人一倍気を付け、口にする物は勿論、肌に触れる物まで無添加の安全安心な物を選んでいました。普段、風邪さえひかない元気な姉なので、この先とても長生きするだろう、お互いおばあちゃんになっても今まで通り毎日情報交換をして、楽しく生きていけると思っていました。話したい事、一緒にしたかった事、一緒に行こうと約束していた場所が沢山あります。

事故の直前、「来年は絶対東京に遊びに行くね」と言ってくれていました。姉を案内したいところが沢山ありました。姉とはこの先いくらでもできると思っていたので、先延ばしにしていた事が悔やまれます。

姉と私が、「小さい妹」と言つてとても可愛がつっていた愛犬を連れ、よく一緒に散歩に出掛けました。季節の花を見て「今年も綺麗に咲いているね」と話しながら散歩する時間は、とても楽しく癒されました。今、その道

を通ると姉に「今年も咲いているよ。もうそんな季節なんだね。一緒に見たかったね。」と話しかけています。

姉が亡くなってから「またね」という言葉が信用できなくなりました。姉と最後に会ったのは、平成二十八年八月二十八日です。大曲の花火を観に帰省していた私を姉が秋田駅まで車で送ってくれました。その時、「次は年末ね。気を付けて帰つてね。」と姉が笑顔で見送ってくれたのが、最後に私が見た姉の姿です。当たり前のように、年末には実家で姉に会えると思っていました。毎年恒例の年末のだまこ鍋作りを家族でして、笑いながら食べられると思っていました。楽しくお正月を迎えられると思っていました。翌年の大曲の花火も行く約束をしていました。そんな当たり前の幸せな日常を、加害者が奪いました。全てを奪われました。

毎朝、目が覚める度に、姉が居ないのは夢では無いという大きな喪失感と深い哀しみで、一日が始まります。姉の遺影を見て、何故こんな形でしか会う事が出来ないのか、加害者は毎日当たり前の様に愛する家族に会えているのに、何故私達は会えないのかと悔しさと怒りで遣りきれません。

姉の部屋は姉が使っていたままにしています。いつも発声練習していた机、姉が着ていた服、大好きだったアナウンスと料理の本、仕事用のたくさんの衣装、今後使用する為に纏め買っていた物など、たくさんの物に溢れていて、時が止まったままです。

身勝手な行為で姉を殺し、姉のたった一度きりのやり直しのきかない人生を奪い、謝罪も一切しなかった加害者が、自分の人生を歩んでいこうとしている事が許せません。

なぜ、姉が殺されなければならなかったのか。なぜ姉を殺した加害者は生きているの

か。私達の言葉に言い表す事のできない苦しみ、大きな喪失感、壮絶な哀しみ、加害者への強い憎しみは一生続きます。

以前、姉と道路に供えられたお花を見て、「ここで事故に遭って亡くなった方がいるんだね。」と話した事がありました。まさか自分の身に起こるとは誰しも思わないはずです。ハンドルを握るとはどういう事なのか、同乗者の命を預かるという事、一瞬でも視線を外したら事故を起こしかねない事、車は凶器になる事。ハンドルを握る重みを認識して運転していれば事故は起きないと思います。

青信号で横断歩道を渡っていても、停車せず進入してくる車両を多く見掛けます。ウイinkerを出さずに、車線変更や右左折する車両もあります。事故が起きてから気づくのでは遅いのです。一人の命を奪うとはどういう事か、奪われた家族はどのような想いなのか、加害者は同じ立場に立たなければ、私達の苦しみは分かりません。加害者にも同じ苦しみ

を味わって欲しいです。

姉がこれから歩むはずだった希望に満ちた人生を返してください。

私達が姉と歩むはずだった人生を返してください。

姉の人生を奪った事、私達の人生を大きく狂わせた事を一生忘れないでください。

最後に、絶望のどん底に突き落とされた両親と私の想いに寄り添ってくださいった被害者支援の皆様方には、心より感謝しております。皆様のサポートが、私達遺族の大きな支えとなり、絶望の中、力になりました。

一人一人が交通安全への意識を高く持ち、「ただいま」の言葉の重みを感じてもらえたらと思います。



イラスト 泉 牧子

無念

佐川 宏

父は本が好きでした。なぜあんなにも好きだったのか、息子の私にも不思議なくらいでしたが、おそらくは本から知識を得ることがとても好きだったのだと思います。父が高校生だった頃、どうしても欲しい本の全集のようなものがあり、母親に頼んだところ、修学旅行との二者択一を求められ、泣く泣く本を選んだという話を聞いたことがあります。生後間もなく父親が病死し、おもに祖母に育てられたそうです。母親は再婚し、父とは別世帯となりました。父は一度もそうは言いませんでしたが、私が周囲から聞いた諸々の話からは、孤独な若い時代を過ごしていたことが推察されました。

たいへん子煩悩な父でした。子供に贅沢をさせることはありませんでしたが、付きつき

りで兄と私の勉強を見て、本を買って来てくれて、一緒に工作やキャッチボールをしてくれました。車は運転できませんでしたが、自転車でプールや公園などあちこちへ連れて行ってくれました。疲れた様子や、億劫なそぶりは見た記憶がありません。その父に、「よその家は車があつてうらやましい」など何度も言ったことを、今では申し訳なく思っています。

兄が大学で県外へ出るまでは、夕食はいつも家族四人揃ってとっていました。兄と私の他愛ない会話に真剣に耳を傾け、実に愉快そうに笑みを浮かべたものでした。当時は当たり前前の日常でしたが、今は無性に恋しく思い出され、いたたまれなくなります。

父は銀行に勤務していましたが、並行して税理士免許を取得しており、定年まであと一年くらいという時に銀行を退職し、経理専門学校講師となりました。まだ大学生だった私の教育と家のローンなどを考え、母と相談して六十歳を過ぎても働ける道を選んだのだそうです。その数年後には自宅で税理士事務所を開業し、母の助けを得ながら人生初の自営業にコツコツ真面目に取り組んでいました。人柄が良いお客さん達に恵まれ、そのおかげで小規模ながらも無事に税理士業を営み、専門性を生かすことにやり甲斐を感じているようでした。

人一倍明るく気丈だった母は、我が家の太陽のような存在でした。十七年前、鬱病という予想もしなかった病を患い、数ヶ月の入院治療の後に自宅療養に入りました。兄は転勤族で私も結婚して実家を出たため、父が一人で母の世話にあたり、多種多量で複雑な薬と

服薬の管理に加え、家事の大部分を行い、さらに税理士業務もこなすのはもちろん大変だったはずですが、同時にその生活が心の張り合いにもつながっていたのだと思います。八年前の年明けに母が不慮の事故で急逝すると、父は張り合いを失ってしまい、長年付き合いのあった良い顧客の方々に断りの電話を入れたり、税理士廃業を口にしたりするようになりました。そわそわして何も手につかない様子で、受診したところショック性の鬱状態と診断されました。

父を一人にしておかれないことは明らかに、妻の理解を得て私たち夫婦が実家で同居することになり、父は少し安心したようでした。増改築工事が終わる頃には娘が生まれ、三世代同居となりました。娘が物心つくとき、父は頻繁に絵本を買ってきては、読んで聞かせていました。夕方、保育所から帰ると父の住む一階の居間で一緒に絵本を読んだり、絵を描いたりするのが娘の日課となり、平仮名

はかなりの部分を父から教わったと思います。一緒に食事をしたり、ドライブに出かけたり、本当に幸せな毎日でした。税理士業に向かう意欲もすっかり戻り、生涯現役を口にするほどでした。

二〇十四年十一月十一日の朝、仕事や保育所に向かう私たちを見送った父は、「気づけな」といういつも通りの言葉をかけました。

それが父の言葉を聞く最後となりました。日が暮れてから職場に電話があり、父が車にはねられたのです。せいぜい、悪くて骨折ぐらいのケガだろうと思いつつながら病院に向かいました。アスファルトに頭部を強打しており意識不明の重体でした。緊急の手術が行われましたが、成否は予断を許さないもので、待合室での数時間は生きた心地がしませんでした。手術が無事に成功した後も数日間、重篤な状態が繰り返されましたが、医師、看護師の方々の懸命な治療で何とか峠は越えま

した。一命はとりとめたかに思われ、その後何年植物状態が続こうとも、命があることに感謝してしっかりと面倒を見ようと、妻と話しました。しかし、翌年の二月二十六日未明、容態が急変した父は転院先の病院で亡くなりました。電話を受けて駆けつけると、前夜見た時から変わり果てた父の姿がありました。

父が事故にあったのは午後の五時半頃で、普段なら外出する時間ではなく、実際食卓には、食べかけの夕食が残っていました。なぜその日に限ってそんな時間に、しかも急に外出したのだろう、という疑問が私たちの頭から離れませんでした。しばらくして、市役所で父の戸籍謄本を受け取った時、父と母の結婚記念日であったことを知りました。おそらく、夕食をとっている最中に思い出し、何か母にと思って買いに出たかと思うと、耐え難い切なさを感じます。

事故、手術、入院、葬儀、訴訟が数ヶ月の間に集中しました。多くの人たちに励まされ

ました。感謝の気持ちはずっと忘れません。

一方で、心は荒んでいきました。各方面で人と衝突しました。「車社会では誰の身にも起こりうる」「歩行者にも非がある」「老人がなぜ日没後に」面と向かって言われたこともありましたが、それ以上に、聞こえないところで言われて、または思われているように感じられ、反発しました。怒りつぽくなり、家でも口論が増えました。本当に、憎むと心が荒みます。自分で自分をコントロールできなと感じることが多くありました。兄や妻が一生懸命に私を諫めてくれて、徐々に冷静さを取り戻していくことができましたが、皆に辛い思いをさせてしまいました。

怒りや憎しみよりもっと大きいのは、やはり喪失感とやりきれなさです。八十一歳を前にして、父は大きな疾患を一つも抱えておらず、食欲もあり、少なくとも八十年代後半までは税理士を続けたいという話もしていまし

た。一方で私は、いずれは病気や老化で日常生活が困難になることもあり得ると思っていました。そこで面倒を見るのが、同居する自分達の務めです。それなのに、何の兆しもなく、よってこちらに何の心の準備もないまま、父は車にはね飛ばされ、アスファルトに頭を強打して、言葉を交わせなまま他界。

徐々に弱っていったわけでもなく、まだまだ続くはずの人生の真つ最中で、突然に打ち切られました。この虚しさ、やりきれなさは一生消えないでしょう。家族四人で過ごした幸せな子供時代、あれだけかわいがってくれた父に、何十年か後にこんな事態が待っていたなんて、受け止めるには非情すぎるし、今でも受け止められません。本当に大切な父でした。返し切れはしないけれど、一緒に暮らしながら恩返しをしていくつもりでした。お父さん、もつと昔の話を聞きたかった。もつと親孝行したかった。最期はちゃんと送りたかったよ。



イラスト 泉 牧子

大切な日常

上 杉 芳 則
春 美

いつも通り交わした言葉。

「じゃあね、気をつけてね」息子の優弥^{ゆうや}は「うん！」と笑った。

これが私との最後の言葉になるなんて思いませんでした。

翌日には「ただいま！」とドアを開けて帰って来て「お帰り」といつも通り交わすはずだった言葉。

いつも通りって何だろう。なんでいつも通りじゃないの。

夜遅く家にかかってきた電話。

何か嫌な予感がして、私は二階から駆け降り主人が誰かと話しているのを横で聞いていて、事故の知らせだと知った。

この知らせのほんの数十分前に、主人は優弥と電話で話をしていました。これが主人にとつて優弥との最後の会話になるなんて思いもせずに。電話を切った約十分後に事故に遭いました。

平成二十三年八月十二日二十二時十六分頃、河辺の国道十三号線で、軽自動車がセンターラインを越えて対向して来た大型十トントラックと正面衝突をしました。

友達が運転する軽自動車の助手席に、優弥が乗っていて事故に遭いました。事故の原因は、運転していた友達の居眠り運転とみられました。

優弥は、大学病院に運ばれて懸命な治療を受けましたが、三日後には脳死、九日後に息を引き取りました。大学二年生の夏、十九歳十一月、私たちの長男です。

たった一つの不注意で、優弥の大切な命、そして優弥に関わる人の未来までも変えてしまいました。

いつも通りの朝は、もう二度と訪れません。

「おはよう」の声が聞こえない。

「優弥」と呼んでも返事が返ってこない。

優弥が使っていたお茶碗や箸、部屋にある物全てそのままでも何も変わっていないのに、それを使う優弥がいない。

十一年間続けてきた大好きなサッカー。

ユニフォーム、サッカースーツ、ボール、使う人を待っているかのよう。

出来る事なら、ボールを追いかける優弥をもう一度見たい。応援したい。

どうしてそれが叶わないのか、どうしてここに優弥がいないのか、いまだに整理がつかないままです。

十九年間、ずっと一緒にいたのに、これから先もずっといるはずだったのに。突然、家族を失うという事は、想像を絶することです。

想像できますか。昨日まで元気で一緒に笑っていた家族の一人が、突然命を奪われる事を。きつと想像する事は、出来ないと思います。自分の家族にそんな事が起こるなんて考えもしないから。私たち家族もそうでした。

でも、被害者遺族になっってしまったと言える事があります。交通事故は、誰にでも起こり得る事なのです。今、こうして生きていられる事、本当は奇跡なのかもしれません。

優弥と過ごした日々を想い、悲しみを背負い、優弥の分も一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。

楽しかった日々をありがとう。

私たちが子供に生まれてきてくれてありがとう。
と。

これからもそれぞれの胸の中で、ずっと一
緒に生き続けてるよ。



二年前の交通事故の経験から考えること

（七十五歳男性へ（現在七十七歳） 貴方は犯罪者です）

匿 名

二年前、エアバッグが弾けて視界を遮られ事故に遭ったと咄嗟に思った。邪魔にならないうように車を移動しようにも辺りが見えず、事故現場近くの店主が誘導してくれて静かに前進して駐車できた。自分の記憶では十字路で自分の住んでいるコミュニティFMを聞きながら赤信号で停車していた。青信号に変わり、一台前の白い乗用車が左折し次に前進した筈だった。助手席側から直角に、ブレーキを踏むことなく突っ込まれたのだと思う。

間もなく七十五歳男性と同乗していた同年齢くらいの女性がやって来た。「警察に連絡したら、お互いに連絡先を交換して待つて下さいと言われました」と言った。相手は名刺を出し（肩書、勤め先無し）、こちらは転職

して五日目のことだった。

警察の事情聴取になった際、彼らは、青信号だったと。だからブレーキも踏まずに前進したのだと捲し立てた。人間哀しいものでありにも自信満々に主張されると、自分が赤信号で車を発進したのか？と不安になった。深呼吸し冷静に考え いや、自分の前に車が停車していて左折したのだと鮮明になったが、黙って相手の言い分を聞いた。嘘で正当性を訴えているのか。咄嗟に認知症か？しかし女性も青信号だったと騒いでいた。怖さを感じるほどの勢いで。

保険会社に連絡し車のレッカー移動を依頼して、次第に吐き気が増すため、来てくれた身内に連れられて休日救急外来で受診した。

相手側はどこまでも青信号で前進したと言いきり、保険会社からは「この状態では保険金の支払いはできない」と告げられた。警察からは相手は信号を確認していなかったと連絡が来ていたにも拘わらず。幸いガソリンスタンドの職員の、こちら側が赤信号で止まっただけで、信号が変わって動き出したとの目撃証言があり保険金は支払われることとなった。

しかし、新車で購入し一度も車検を取っていない車のフロントがボコボコになりボンネットも開けられず、僅か二十八万円で買い取られた。保険会社からは修理代金として九十八万円しか支払われなかった。自己資金百五十万円を追加し車を買うしか選択肢はなかった。むち打ち症で整体に通うが、転職先でいい顔をするはずもない。結局、退職に追い込まれた。加害者男性は保険でカバーできたと思うのか謝罪の一言もなかった。

事故に遭った日は、東京から生後四ヶ月の孫が来るはずだったが、親の体調不良で延期

になっていた。「もし、孫が同乗していたら、障害でも持つようになっていたら。」と考えると背筋が寒くなる。孫の命を失うよりは良かったのだと、自分に言い聞かせては納得するように努力しているが、あの事故に遭遇しなければ何事もない日常を送っていただろうと考えると、悔しきだけは拭えない。無収入に追い込まれて笑える筈はない。精神的にもかなりキツイ日々が続いた。

あの七十五歳加害者男性は、今頃どうしているのかと考える。長年車を運転していると確かに自動車を動かすことはできるでしょうが、あなたが他人の人生を変えてしまっていることに気付いているのかと怒りがこみ上げる。彼は高齢で何処に向かっていたのか、住所地从かなりの距離を運転してきたのだと思う。同乗者と会話しながら運転していたのだろうか。信号無視するくらい夢中で。

高齢者の運転による事故のニュースを聞く機会が多くなったが、自分のお孫さんが交通

事故で亡くなる、または障害を持つようになったとしても、謝罪の一言がなくても保険金が支払われたのだからと相手を許しますか。と問いたい。事故調査に來られた警察官は、良し悪しのジャッジはしませんとのことだった。だからと言って、警察に話す内容と保険会社に告げる内容に食い違いがあるとは、何を意味しているでしょうか。加害者男性の、認知機能低下を自分は疑っていた。長年続けた運転はできるから自分は大丈夫と思うでしょうが、果たして的確な判断ができるドライバーと言えますかと問いたい。人身事故でなくとも、死亡事故でなくとも被害者の人生が変わってしまうこと、他人の人生を奪ってしまったことを加害者は考えたでしょうか。今も運転しているのでしょうか。運転免許証を返納する勇氣を持ってくれたでしょうか。次の被害者を生んでいないでしょうか。

歳とともに運動機能と反射神経は鈍ります。だからこそ更なる注意力を要するのでは

ないですか。自信をもって、自分は大丈夫と言い切れますか。高齢者ドライバーの事故発生率の高まりから、免許証をどのタイミングで返納するべきかを議論するテレビ番組を見る機会が増えています。確かに車がないと不便だとは思いますが。運転席に座って、手足が動けば車は動かせます。しかし、刃物を持つて相手を刺すことだけが殺人に繋がるわけではないのです。車も人を殺めることができるのです。避けられない事故もあるでしょうが。交通事故であつても立派な殺人者となりうるのです。犯罪者です。

物忘れが多くなつたと感じている時点では、それほど認知機能は低下してないと思われませんが、自分は大丈夫だと言い張るようになった時はご家族や回りが、運転をやめさせるべきだと自分は考えています。

例えば、運転免許証は八十歳になつたら資格喪失する。と決まっていれば八十歳以降どのように不便さを解消するか考える時間もある

り、準備もできるはずですが、残念ながらそのような規制がないのが運転免許証です。

野球選手の時代と年齢から引退を決意される潔さを見習いたいものです。

最後に人間だったら謝罪しなさい。子供が悪さをしたら叱ってしつけるでしょうが。自分ではないのですか。



イラスト 泉 牧子

変わらぬ想い

熊谷文子

私には生きていたら二十歳になる息子がいました。息子は平成十七年、今から十二年前の秋の小学校からの下校途中、交通事故に遭い命を落としてしまいました。もうこの世にはいません。

息子は当時、一人息子で黄色いカバーを付けたランドセルを背負った横手市立朝倉小学校の一年生でした。息子の同級生は今年、誕生日が来ると二十歳になります。昨年の三月に高校を卒業し、それぞれ大学や専門学校に進んだ子供さんといえば、地元や県外に就職された子供さんもいることでしょう。普段の生活の中ではなかなか見かけることはありませんし、子供の顔は成長とともに変わりません。きつとすれ違ってもわからないかもしれません。あの小学一年生だった子供さんたち

は運転免許を取得し車を運転する歳になったのです。生きていたら私の息子も来年の夏に成人式を迎えたことでしょう。

今月、息子は二十歳の誕生日を迎えました。皆は二分の一成式、小学校、中学校、高校生という時間を過ごし大人になったのに自分の息子はいつまでも小学一年生のまま、これ以上大きくなることはなく、あの日、いつもと変わらず普通に元気に「行つてきます」と出ていった息子は、その後、一度でも「ただいま」と帰つて来ることはありませんでした。ちゃんとさよならもしていないのに、心の準備も無いまま突然ああいふ別れ方をしたことが、自分の中のこれ以上ない深い悲しみで、これは私が死んであの世に行く時もこの気持ちを持っていくことでしょう。

思いもよらない事故で息子を失った悲しみ、苦しみはわずかでも癒えたと思ったことは無く、死ぬまで一生逃れることはできないものだと痛感しております。

今頃、どんな生活を送っていただろうか。どんな顔で、どれくらい背丈になっていただろう。どんなに考えてみても想像することができません。ただ一つ言えるとしたら、息子本人も私も家族も、今とは全く違う生き方をしていたことは確かだと思いました。あの日、何の前触れもない、予想もしていなかった息子の事故。まさか自分の息子が交通事故で命を奪われてしまうなんて夢にも思っており前にやってくるのだと思っていました。普通のいつもどおりの今日だったあの日、まさかあの日の朝、いつもどおりに「行つてきます」と家を出て、恥ずかしそうに二度振り返り、手を振った姿が息子との最後になるとは夢にも思いませんでした。

事故は、みんなが普通に通る生活道路で起きた、予想もしなかった事故でした。

平成十七年、十一月二十八日の十五時四十分、あと家まですぐの県道交差点を横断中、息子の進行方向右側から来た車の右前部ではねられ、ボンネットに当たり、フロントガラスにぶつかって、十七メートル飛ばされ、意識不明の重体でした。ブレーキ痕は無く、十四時間後の翌日早朝に意識が戻らぬまま息を引き取りました。

この加害者は、事故の一週間前にも二十三キロオーバーのスピード違反で捕まっていたというのでした。仕事はきつく、成績をあげるために車の移動時間を短縮させようと考えていたとも言っていました。あの日はもうすぐ十二月だというのにこの時期には珍しい、朝から太陽が眩しく、暖かな良いお天気で、色に例えると黄金色の景色の日でした。日が暮れるまでにはまだ早い時間。じゃあなぜ……。あの日、父から事故の知らせが入った

時に電話の奥から聞こえてきた息子の泣き声は、今でもはつきりと耳に残っています。しかし、私が現場に駆け付けた時には青白く、呼吸もしていませんでした。事故直後に通りがかった看護師さんが氣道の確保をして下さったのでした。息子は手術をし、たくさんのお器械をつけ、懸命な治療が続けられましたが、もう目を開けることはなく、それから本当は何もかもが生き地獄のようでした。

突然の息子の変わり果てた姿、何が何だかわからないまま次から次へと人が訪れ、十分な息子との時間もないまま葬儀屋の指示通りに仏事が進んでいくのでした。その一方で、なぜこのような事故が起きたのか？二十四時間以内の死亡事故なのに、なぜ加害者は逮捕されないのか？なぜブレーキの痕がなかったのか？加害者はどうなるのか？何か情報がある度に、警察から連絡が入るものだと思っていました。しかし何の情報も入ってこないため、何度もこちらから足を運んだりしました

が、今は調査中と言うだけで、明確な答えを得られませんでした。どうして自分の息子のことなのに知ることができないのだろうかというライラや焦りが続きました。また、目撃者を探しても見つからない。私達は突然の出来事に頭も心も追いつかず、冷静ささえ見失っている混乱した状況の中で次にどうなるのか？どうしたらいいのか？当然、刑事事件の手続きの流れなどわかるわけもなく、どこに、また、誰に頼り、何から相談したらいいのか、助けてくれるところもなく、まるで、真つ暗な海の中に放り投げられ、もがき苦しむかのような日々でした。また、自分の身に何が起きているのか理解できないそんな中、検察庁や警察署に出向き、法的なことが進んでいくのでした。

裁判で加害者は禁固六カ月執行猶予二年という無罪同様の刑を言い渡されました。私達は到底納得できませんでした。さらに加害者は、裁判所からの帰り道、交差点を横断中、

奥さんに話しかけながら笑って歩いていたのです。刑が軽くて良かったと思ったからなのか、終わって良かったと気が緩んだのか、何で笑っていたのかはわかりません。加害者の笑顔を私達が初めて見た瞬間でした。人の命を奪ってにおいて、裁判直後に笑えるという心境がとても理解できず、私達は馬鹿にされ、頭から水をかけられたような気持ちでした。

しかし、加害者が笑っていて、心から反省していないと抗議しても、裁判はやり直しかつことはできるわけもなく、加害者の一人勝ちのように思い、何をしても救われない息子の命は、毎日のように起きてしまう交通事故の中の一件にすぎないと扱われたのだと悔しさと無念でいっぱいです。加害者は転勤し、自分の過去を知る人のいない土地で普通の暮らしに戻っています。また、免許を取得したと聞き驚きました。よくハンドルを握る気持ちになれたものだと、ここで加害者と被害者の心の回復の違いを強く感じました。私の個人

的な意見として、交通事故を起こした人間は、例え二週間でも、一カ月でも、一度は刑務所に入り、自分の罪と向き合い考える機会があったほうが良いのではないかと思うのです。刑務所に入らなくて良かった、刑が軽くて良かったではなく、なぜこのような事故が起きてしまったのか、また、何に対して反省するのか、人の命の重み、大切さと向き合う時間が必要だと思うのです。裁判が終われば終わりではないのです。

気がつくと事故から十二年という時間が経っていました。この十二年という時間の中で、周りはいろんなことがものすごい速さで進んでいきました。でも、自分の息子は小学一年生のまま。私はこの十二年、ただただ息子が生きていたことを忘れてほしくなくて、忘れられることが怖くて、忘れてほしくないことだけにしがみつき、がむしゃらにやってきた気がします。泣いたら加害者にも世の中にも負けてしまうと必死だったと思います。

強くなったつもりでも、どれだけの量の涙を流したでしょうか。支援も、救われる命（人）と救われない命（人）があり、悔しい思いをしたこともありました。息子のいない現実を生きるとは、十二年経った今も辛く、時にはこの苦しみから解放されたいと思う時もありました。

あれから生活も変わり、今では息子の話をするとも少なくなりました。今を生きにくいようで諦めたり、精神的に我慢を強いられることもあります。一つ一つの自分の心と折り合いをつけていくしかないことも、自身で理解できてきました。息子の事故から「普通に生きていたら分からなかったこと」を学んだ気がします。

今は微力ながらも「命の大切さ学習教室」で小中高生の方々に私の被害体験を聞いていただいております。事故は特別で遠いものだと思っておりますが、話を聞いて下さった生徒さんの感想の中に、自分や家族が事故に

遭ったことのある人や、事故に遭いそうになったことのある人、事故を目撃したことのある人が多いことに驚きました。私自身、話をすることで強く事故を思い出したり、向き合うことが辛く、また、息子の悲しい話をするのがいいことかどうか迷い、終わった後、しばらく悩むこともありましたが、明日を生きることのできなかつた息子を生かしてあげられるように、また、自分達と同じ思いをする人がでないようにという思いを込めて、息子の命を無駄にすることのないよう、お母さんを頑張っていくのだと思いました。

また、この手記を手にとって下さった方々にもどうか今一度交通安全について考えて頂き、どうしたらかけがえのない命を守れるのかを自分自身や自分の家族に置き換えて考えていただけたらいいなと思います。歩行者フアーストということを心に置いて運転していただけることをお願い致します。

雄宇^{ゆうや}也へ

雄宇也お元気ですか？

今どこでどんな暮らしをしていますか？

不慣れな思いはしていませんか？

お母さんの作るカレーは届いていますか？

カレーが食べたくなった、米が無くなったから送つてと言われたら、すぐに送り状を書いて送れる場所に居られたならどんなに良かったか。

そうだ、改めてこのあいだは二十歳の誕生日おめでとう。

毎年ウルトラマンのおもちやも進化しているね。

新しいどのウルトラマンが欲しいのかお母さんにはわからなくなってしまうたよ。

皆は大人になって自動車を運転する歳になりました。

トミカじゃないよ。本物の車。雄宇也は自転車が大好きだったね。青い自転車でいろんな所を走っていますか？

お母さんの心の中にはいつも「ハナミズキ」の歌が流れています。

円谷プロダクションに入社すると言つて笑わせてくれたね。その夢は叶いそうですか？お母さんは、前は一日経つ度に雄宇也と過ごしていた時間が遠くなることが悲しかったけれど、今はね、一日経つごとに雄宇也に会える日に近づいていつてるんだと思えるようになりました。いつか必ず会える日が来る。

薄紅色のかわいい雄宇也の果て無い夢がちゃんと終わりますように雄宇也とお母さんが百年続きますようにと願っています。

最後に見た大曲の花火からはしばらく花火を見ることができなかったけど、今は地上から花火を見上げるとお母さんと空から見下ろす雄宇也と繋がつてると思つてます。雄宇也も一緒に見てるんだよね。

ずっとずっと大好きだよ、雄宇也。ほんとうに、ほんとうにごめんね。



雄字也くんが書いたはがき

支え合い、折り合いをつけて生きる

三 浦 芳 子

国の内外を問わず、自然災害でたくさんの方が亡くなりとても残念な事が起きています。さらには、事件や事故に巻き込まれる被害者も後を絶ちません。近年は、児童虐待や性被害の問題も多く耳にするようになりました。精神的、肉体的に受けた傷の深さは計り知れないほどの衝撃だと思います。命の尊厳がないがしろにされ、あまりにも身勝手な犯罪にやりきれなさを感じます。被害者になる可能性は誰にでもあります、実際に自分が当事者になると思いながら生活している人はほとんどいないと思います。私も我が子を失うまではそうでした。

十七年前の平成十三年四月二十日、大学三年生になったばかりの娘芳代子^{かよこ}は、帰宅途中に脇見運転の十トントラックに轢かれて命を

奪われました。娘が亡くなってしまった現実には到底受け入れられませんでした。「なぜ我が子だったのか」「ここまでの二十年間は何だったのか」「なぜ、どうして……」の答えが無いまま時間を過ごしてきたような気がします。この世に生を受け十分に生き抜くことが出来なかった娘、親より先に、しかも理不尽に命を奪われた娘の無念をどうすることも出来ません。

当時、大学生の娘は今までで一番充実した日々を送り、将来の職業についても真剣に考えていました。私も娘の将来に期待しながら、共に生きて行くのを楽しみにしていたのです。

娘が亡くなってから大学を卒業するまでは、学生生活を送っていると思うようにして

いましたが、卒業後の娘の姿が想像出来なく、空しいばかりでした。

被害直後からしばらくは、悲しみや苦しみ、やり場の無い怒りなど様々な感情に襲われ、ずっとこの渦の中にいたような気がします。

桜が満開の日に旅立った娘ですが、あの日から数年は桜を見るのも辛く、お花見のシーズンが嫌いでした。生きる気力を無くし、いつの間にか他人が信じられなくなり、人と会うのが怖くなり、孤独感に苛まれた時期もあります。

あの日から十七年経ちました。娘を失った悲しみが消えることはありませんが、いつも娘と一緒に生きてきました。会いたいと思う気持ちは常にありますが、それも叶わない今は、家庭内での嬉しい事や悲しい事、社会の出来事などを娘と重ね合わせ、語りかけたりしながらの生活です。今は当時の激しい感情は無くなりましたが、それでもふと心の隙間

に当時の自分が入ってきて苦しい時があります。苦しみの中から少しずつ前を向いて歩けるようになったのは、たくさんの方の被害者遺族達との出会いがあり、さらには支援者達との出会いがあったからです。他者との交流を通して自分の心をほぐし、いつの間にか折り合いをつけて生きられるようになりました。

冒頭書きましたように、事件や事故に巻き込まれる危険性は誰にでもあります。しかし一般的には、日頃から被害者関連の情報を持つている方は少ないと思います。突然の被害に混乱して冷静な判断が出来ないのもごく当たり前ですし、どこに何を相談すればいいのかわからない被害者も多いです。

平成十六年に犯罪被害者等基本法が制定されて以降、被害者支援の環境は随分整備されてきました。支援に関わる様々な団体や組織もあります。ただ、一般の方々の認知度は、まだ十分とは言えない状況です。それでも何か一カ所でも相談場所に繋がれば、そこか

らさらに支援が広がって行くと思います。

犯罪被害者達が、以前のような生活を取り戻す事は難しいです。特に家族を亡くして、二度と戻らない命と向き合って生きる大変さは外からは見えにくく、当事者にとってはとても辛いものです。被害の状況も抱える問題も十人十色です。今も事故や事件で苦しんでいる被害者達はたくさんおられます。誰もが安心して生きて行くためには多くの支援が欠かせません。

犯罪の被害者を出さない社会が一番ですが、不幸にも発生した場合は被害者やその遺族を孤立させない、寄り添う社会であって欲しいと思います。



イラスト 泉 牧子

精神疾患と共に十年、そして、これから

被害者遺族が経験する精神疾患の一例

匿名

何が何だかわからぬうちに葬儀は終わった。ICUが母との永遠の別れの場になるとは考えたことがなかった。そして、ICUでの出来事が甚大な苦痛、苦難や障害をもたらすことになることも。

葬儀の中で肝心なことを失念していた。それは一度限りの現象ではなく、葬儀後も頻繁に発生するようになった。初七日が過ぎたころから、目、耳、首等周辺が痒く湿疹が目立つようになってきた。

当初は疲労によるもので、時間と共に回復するだろうと樂觀的に考えていた。しかし、次々と新たな症状が顕在化してきた。先祖、両親が遺してくれた山林の刈り払いをしてい

るときに、微かだが鋭い金属音のようなものを耳にする。その音の発生場所を探すが見当たらない。四十九日法要が終わった頃、一時間近く車を運転した時のことである。目的地到着直前にも同様の症状が出た。

仕事に集中することで母の事故を忘れようとしたが、異なる症状が表れてきた。夏の暑い日でも両手の指や両足首が冷凍庫に入っているように冷たい。冬の寒い日であるにも関わらず、背中に大量の汗をかくようになり、目、耳、首等周辺の湿疹は更に加速していった。ドアにぶつかることが多くなった。ドアの存在は認識しているが、その記憶が瞬間的に消え、自動ドアと誤認識しドアにぶつかるのである。

このような状況は職場の関係者には怠惰な間抜け者に映っていたかもしれない。それでも職場はもちろん自宅でも、くしゃみや欠伸が無く、疲れているのに眠気をさすことがないのが不思議であった。

ある日、自宅で戦や死の場面がある大河ドラマを集中して観ている時にバットで頭を殴られるような衝撃を受けた。職場ではパソコン画面やスクリーンを見ている時、突然に頭が重苦しくなり、激しい風圧のような衝撃を受ける機会が何度かあった。

自分の心身に起きている徒ならぬ現象に恐怖を感じ、心療内科を受診するようにした。恐怖感により精神的に不安定であり、主治医に症状を適切に伝えきれない時が多かったように感じる。ある時、母の事故時の状況及びその後に顕在化した症状を時系列的に整理し作文として主治医に伝えた。

PTSD (Post Traumatic Stress Disorder:

心的外傷後ストレス障害) であり、侵入 (Intrusion) 現象と意識変容が起きているとの所見が言い渡された。更に次のような見解をもらったが、理解できるような、できないような複雑な気持ちになりながらも、何とかしなければという焦りが大きくなってきた。

「ICUでの出来事は生涯にわたって全く予想しえない異常現象だった。

『異常な状況に対する正常な反応』が症状として表れている。

自己防衛反応であり現在の疾患になつてなければ心臓発作を起こしているか、発狂しているかのいずれかである。

全身全霊の反応が現疾患である。」

このような状況でも最小限の日常生活は営まなければならなかった。親戚の法要に行き、ランドセルを背負った幼友達の遺影を見

ていたら、急に頭が重苦しくなり侵入現象に襲われた。また、不幸があった家庭の葬儀用献花を目にしただけで、パトカーや救急車の音を聞いただけで同様の症状が表れるようになった。車の運転においても、一、二キロメートル走っただけで侵入現象・頭重（頭痛）に悩まされることが増えてきた。特にパソコン操作後の運転は酷かった。当然のことながら車の運転後のパソコン操作での侵入現象にも辟易した。

意識変容や侵入現象は自分の意思に関係なく発生し、「パソコン操作日はテレビ観賞及び運転をしない。車運転日はパソコン操作及びテレビ観賞をしない。テレビ観賞日はパソコン操作及び車運転をしない」を原則にした生活に変えざるをえなかった。

侵入現象と意識変容の重症化と新たな症状の発生に恐怖心を抱きながらも、事故前の生活に戻りたい意欲は増していった。関連する

講演会や被害者の会等に出席し改善・解決策のヒントを得ようとした。主治医やカウンセラーのアドバイスをもらいながら復活・復興策を実行していった。

十五分操作、十五分休憩のサイクルでパソコン操作のリハビリテーションを開始したが、侵入現象・頭重（頭痛）との闘いが続いた。運転中の意識変容は第三者を事故に巻き込む危険性があり、ハンドルを握る回数を減らしていった。手足の防冷対策として使い捨てカイロ、レッグウォーマーやレッグカバー等を着用したこともある。テレビは一週間に一時間位しか観なくなつた。自分自身に課したりハビリテーションだが、三年以上経過してからやつと、微かな効果を自覚するようになった。意識変容や侵入現象は緩和傾向にあることを認識するようになった。心療内科で処方してもらう薬も主治医と相談しながら少しずつ減らし、ある時から思い切つて服用を

止めた。

緩和してきているが、事故から十年経過した今でも、意識変容や侵入現象は完全に消えていない。心臓発作や発狂に至っていないのだから運が良かったのかもしれない。映像物、運転、仏事等は意識変容や侵入現象の因子であり、自分には鬼門であることを意識するようになった。パソコン画面に集中し考え込んでいる時は今でも侵入現象を覚えることがある。いつ起こるが分からない意識変容を考慮し可能な限りハンドルは握らないことにし、車そのものを手放した。湿疹は時折発生し皮膚科で処方した薬・軟膏のお世話になっている。葬儀や法要等の仏事はなるべく妻に参列してもらっている。

精神疾患は第三者が見ても判りにくい。毎日、一緒にいる妻でさえ、気づかない時もある。精神疾患の完治・寛解を諦めたわけでは

ないが、上手に付き合うのも解決方法の一つと言い聞かせているこの頃である。



また夏がきて　　ゝ還暦を迎えて共に生きるゝ

小川 トシエ

昭和五十三年夏、杜の都仙台の地から降つて湧いたようにヒットした曲「青葉城恋歌」私がこの歌を耳にしたのはその年の秋でした。友達の車で帰り道、カーラジオから流れてくるこの歌にびっくりしました。まるで浩司をモデルにしたような歌詞でした。

広瀬川流れる岸边
思い出はかえらず
早瀬躍る光に
揺れていた君の瞳
季節はめぐり
また夏がきて
あの日と同じ流れの岸
瀬音ゆかしき杜の都
あの人はもういない

一緒に乗車して賑やかだった車内が、急に静かになりました。助手席の人が、スイッチを切りました。しーんと静まり返ったまま、自宅に着きました。

昭和五十三年夏、事故の知らせを聞いて仙台に向かいました。私達が着いたのは深夜でした。それまでのことを「青葉もゆ」に書いてくださった方の文を抜粋して、掲載させていただきます。「青葉もゆ」は、浩司の成人式の時に恩師や友人知人からいただいた二百通を超す玉稿をまとめた遺稿集です。

上巻は、幼稚園・小学校の頃
中巻は、中学・高校時代
下巻は、事故のこと・大学生の頃

この「青葉もゆ」という題名は、東北大学学生歌「青葉もゆるこのみちのく」から、そして浩司のもえるような青春を思つてつけました。

【東北大学学友会卓球部 部誌から】

一年生部員の小川浩司君は、小雨降る七月一日午後一時四十五分頃、川内の大学から、オートバイで鹿野の有朋寮に来る途中、広瀬橋付近で、無理に進路を変更し急に左折した大型トラックに巻き込まれ、全身を強く打って意識不明となり、救急車で宮城野の国立病院へ運ばれて手当てを受けましたが、そのかいもなく事故から約一時間後に永眠されました。

【能代高校同期】

あの日、杜の都は朝から雨でした。夕食後、いつものように自室にこもつ

ていると、祖母の呼ぶ声。ニュースを見ていた祖母から、浩司君の事故のことを知らされ、信じられないまま次のニュースを待ちました。

(中略)

「とにかく、浩司君の収容された病院へ行ってみろ。」と電話で父にうながされ家を出ました。(中略)

僕が病院についた時浩司君は大学の卓球部の仲間数人に付きそわれていました。焼香をすませると、まだ能代から着かない御両親を正面玄関で待つことになりました。深夜の病院の静けさが、浩司君の死の真実を物語っているようでした。玄関で待つ間、御両親に何を言ったらよいのかということで頭がいっぱいでした。御両親を霊安室まで案内する廊下のなんと長かったことでしょう。そして、浩司君ではなくなつた浩司君と

会われた時の御両親の声は、今もはつきり耳の奥に残っています。

「浩司―」

そう言ったきり聞こえなくなったお父さんの叫び、その叫び声を聞いて外にいた僕らも思わず涙ぐんでいました。

「浩司―」

というあの叫び声は一生忘れられないでしょう。あの叫びは、人間の生命の重さと、親の力と人間の無力さを教えてくれました。

【卓球日誌から（卓球部前キャプテン）】

七月二日（日） 晴れ

合宿初日

今朝、小川の遺体と御両親が帰った。合宿に備えて少しでも寝ておこうと思っただがやはり無理だった。悲しみとか寂しさより大声でどなり

たいような怒りが残っている。誰かれとなくやつあたりしたくてしょうがない。不思議と疲れはない。涙も出ない。

白木の棺に横たわった小川の体を御両親のかわりに、ふかせてもらったとき、何を考えていたのか自分でも覚えていない。ただ無意識のうちに体が動いていたような気がする。

（後略）

自宅に着いて棺を見たら、キャプテンの大切なラケットが入っていました。

翌年七月一日、一周忌に東北大学の卓球部からカセットテープが贈られてきました。A面には、卓球部員の声で卓球部の愛唱歌「遠い世界に」と学生歌「青葉もゆるこのみちのく」応援歌が元気な大声で入っていました。続けてグリークラブのすばらしい合唱で学生

歌、応援歌、寮歌などが入っていました。

B面の一曲目が「青葉城恋歌」でした。歌詞も入っていました。二曲目の「荒城の月」は、東日本大震災直後、五月の退職婦人教職員連絡協議会能代山本支部総会で、会員のみんなに聞いてもらいました。震災で亡くなった方々や浩司のことにも思いをはせて涙をこぼしました。

私は、このテープを車に入れて四十年間どこに行くにも、毎日のように聞きながら運転しました。その運転も米寿を機に止め、今は、「青葉城恋歌」を聞くこともまれになっ
てしまいました。

一方、仙台に住んでいた加害者は、昭和五十一年四月から五十三年四月まで、僅か二年間に六回も事故を起こしました。罰金五回、行政処分三十日、受講して即時免許を交付。

そんな男が、五十三年六月十三日に大型一種免許を取得しました。そのわずか二週間後の

七月一日の死亡事故でした。このような危険運転をする男に、なぜ大型一種免許を与えたのでしょうか。怒りがこみあげてきます。

事故後、何の連絡もないので、仙台南警察署に電話をしたら、

「トラックの正面に傷があるので正面衝突ではないか。」

と言うことになっていました。今ならドライブレコーダーですぐわかるでしょうが、真実を証明するのに二年もかかりました。すきんだ心で、荒れ狂った言動の日々が続きました。見かねた友人が、「親より先に逝って、こんなに悲しませて、親不孝だね。」と慰めてくれました。私はこの言葉が胸に刺さりました。そして考えました。浩司を親不孝な子にしてはいけなさと気づきました。この先どんなことがあっても、これ以上の悲しみはないと開き直って生きることにしました。

加害者？現在六十二歳のはず。その後、無事故無違反で過ごしていれば、それでよし。

そうでなければ……思いたくもないし、知りたくありません。

時は流れて、四十回目の夏を迎えようとしていた頃、浩司の友人に声をかけられました。「来年、還暦だよ。」と聞いてびっくりしました。その後、七月の命日に訪ねてくれた友人からも、会合で一緒になった友人からも、「還暦は浩司君も一緒にお祝いしよう。」と誘われました。それで成人式のときに書いていただいた玉稿を読み返してみました。「青葉もゆ」には、浩司の十八年の人生が詰まっています。それにしても、おもしろくて、おかしい子でした。

浩司は、兄の影響もあって、中学生になってすぐに卓球部に入りました。「中学、高校、大学と入部一番乗りを果たした。」と得意になつていました。試合が終わって帰ってくる度に「負けたあ」と言っていました。私は「一度くらい『勝った。』と言ってよ。」

と言いました。でも、卓球日誌には次のように書いていました。

【卓球日誌 中学三年】

6月22日

勇んで全県大会に出発した。（個人戦）

6月23日

個人戦に続く団体戦。準決勝の相手は強豪の本荘北中である。（中略）閉会式が終わって、制服に着がえていたら、下から合唱の声が聞こえてきた。見ると、大曲中学校である。校歌を歌っているのだ。すばらしい男女のハーモニー、思わず涙ぐんだ。バカみたいだ。試合に負けたくせに優勝校の校歌を聞いてセンチになるとは……。

ともあれ、わが能代第一中学校だつて、3位入賞である。（中略）先生も上きげんで駅前金座街の食堂で、

みんなにラーメンをおごってくれた。

(中略) 昭和49年6月22・23日、おれ卓球生活が始まって以来、最も充実していたといえるすばらしい2日間だった。

中学二年の二月、「大変だ。大変だ。当選してしまった。」「俺みたいだ者、市長(生徒会長)になって、先生方も困ってらびょん。」家族みんな「困った、困った。」と一夜を明かしました。それでも「市民、執行部、先生、三者一体であれ」を信条にみんなの協力を得て、何とか学校都市活動を全うしたと思います。

能代高校に入って間もなく、帰宅した私に「一躍人気者になった。」と喜ばせました。

「青葉もゆ」には、次のように書かれています。

【一中・能代高校同期】

あれは、高校一年の春だったと思います。登校の途中、用水路の上にかかった粗末な橋があるのですが、そこを浩司君が自転車で渡ろうとした時のことです。その橋の真中に細い裂け目があり、ちょうど、その裂け目に浩司君の自転車のタイヤが挟まったのです。そして、浩司君は、あわてて足を地面につこうとしたんですが、足が地面に届かず、バランスをくずして自転車といっしょに用水路に落ちてしまったのです。服も鞆もびしょ濡れで、僕は、浩司君の後ろにいたので、その光景をまともに見、思わず笑ってしまった覚えがあります。

二・三年生は、新入生の誰が一番先に落ちるか、楽しみに窓から見ていたそうです。

「浩司が落ちた。」「浩司が落ちた。」と歓声
が上がったとか……。

何が人気者かと呆れてしまいました。

遺品の中に、睡眠記憶枕とかいう枕がありました。どんな難しいことを覚えようとしていたのかと思って、私も枕に頭を当ててみました。何とピンクレディーのUFOではありませんか。「何でこんなものを。」と思いましたが、有朋寮には寮歌がないので、密かに歌と踊りを練習をしていたそうです。

【卓球部員】

彼の日常生活には、いろいろなエピソードがありました。新人戦大会（昭和53年4月22日、23日、於宮城教育大）の終わった後で、新入生が自己紹介をかねて歌を歌わされるとき、ぼくらは恥ずかしがって、なかなか歌おうとせず盛りあがらなかつ

たのですが、彼に順番が回ってきたとき

「僕は有朋（ユーホー）寮なので、ピンクレディーのUFOを歌います。」といって、踊りも見事に全員をびつくりさせ、同時に雰囲気を一転させました。（後略）

【有朋寮セツルメント】

私と浩司君との付き合いといえば、あまり深いものではなかったかもしれませんが。それは学部も異なり、また浩司君がクラブに入っていたというためでしょう。しかし、そのような自分と浩司君との間の付き合いから、浩司君の人懐っこい性格、愉快にさせてくれる性格はしっかりと感じられました。

僕の自転車故障すれば「だめだよ。ちゃんと整備しとかなきゃ。やつ

たげるよ。」と、声をかけてくれるし、また僕が法律を学んでいるうちに大きな問題を見つけ、それを浩司君に語りかけると、真剣に聞いてくれ、疑問に感じたところはすぐに聞き返してくれるし。

バイクを買った晩のことは、今でもくつきりと目に浮かんでいます。

「これ、買ったんだよ。エヘヘ。」と会う人ごとに言い、エンジンをかかしては「ラッキー。ラッキー。」と繰り返して人の顔を見て、「エヘヘ」と笑いかける。そういえば、浩司君の顔で、今はつきりと浮かんでくるのは、あの『エヘヘ』と笑った時の顔なのです。顔いっぱい嬉しさを出し、人の目を見てくる、あの顔です。（中略）

そんな楽しい浩司君でしたが、やはりクラブに入っているために時間

の制限を受け、セツルメントの活動をできないことから、皆といつも楽しくやることができないという気持ちはいつも持っていたようです。僕にしんみり語ったことは忘れられません。

「やっぱり悲しいな。オレ一人だけ、セツルからはぐれてるみたいだよ。」
「そんなことはない。皆、君のこと楽しい男だと思っているよ。」と言っても納得しないようでした。（中略）

僕らサークルの仲間達は浩司君のことを、愉快な男、いや愉快にさせてくれる男だと心の底から思っていましたし、今でもそれは変わりません。今でも戸をあけて「オレのアブさんの漫画知らない。」などと言いながら入ってきそうな気すらします。浩司君のお父さんの言われた言葉、胸にしみております。自分で志した

道、弁護士への道を全うしたいと思
っております。

想いは募るばかりで尽きることはありません。
ん。

私は、昭和五十三年四月末の連休に仙台に行きました。有朋寮は遠いし、老朽化しているので、できれば浩司をもっと大学の近くに移したいと思ったからです。でも浩司は、「僕はここがいい。有朋寮の友達は全部大好きだ。」と言って、動く気は全くありませんでした。私は、新しい所を探さなくてもいいし、世話をかけない子だと思って、安心して帰宅しました。それが、遠くへ行くための最初で最後のことでした。あの時、なぜ無理にでも大学の近くを探してやらなかったかと自分を責めて後悔しました。でも今は、あれが浩司が決めた人生なんだと納得しています。

以前、浩司の先輩の結婚式に招かれた時、親戚の方に「浩司は遠くにいますので代わりに来ました。」と挨拶しました。それ以来、その気で暮らしています。一緒に還暦をしようと言った友人も、生きているといった話ぶりでした。

浩司の友人は、それぞれの立場で中心的な役割を担って活躍しています。また、子どもが社会人になったとか、孫が生まれたとか、知らせてくれます。浩司も遠い所で数学の教師をしながら、卓球のコーチを頑張っています。間もなく同期生と一緒に定年退職ですね。でも、卓球には定年がありませんので、兄と同じように続けることでしょう。

浩司によって、最高の喜びもどん底の悲しみも経験しました。そして、人の情けが身にしました。年を重ね、これまでの人生を振り返ってみるとさまざまありました。今ここに、こうして生きていられることに、感謝しています。

浩司の十八年は、あまりにも短い、小中高そして大学と、立派な先生方に恵まれ、充実した学校生活を送ることができました。また、たくさんの方々とふれ合い、共に遊び、共に学び、そしてスポーツに汗を流しました。また東北大学では、わずか三か月足らずの生活でしたが、四十年も続けて今日まで賀状をくださり、折にふれて近況を知らせたり訪ねて来てくださったり、本当に嬉しく思います。

そして私も浩司のご縁によって、たくさんの方々と新しい出会いがありました。心を開いて語り合える友人、悲しみを共有する方々、支援センターの方達、みんなに支えられて今の高齢を生きています。私が生きている限り、浩司も遠くで生きています。これからもまわりの方々に助けていただきながら、一日一日を大切にして、ちゃんと生きたいと思います。

平成三十年 夏



イラスト 小川 浩司

それでも明日を生きる

安部 有紀

私が鍵をかけ忘れたから

夜中までバイトをしていたから

暑い夏、疲れて下着のまま寝ていたから

だから私はレイプされたの？

イヤ―フォンをして、髪を伸ばして

遠くからでも女だつてわかる格好をしていたから

突然後ろから襲われて、嫌なことさせられたの？

口を押さえられ窒息すると思った

殺されるんだと思った

必死の抵抗も、男の人の力にはかなわなかった

だまれ、動くな、と言われた

殺す、とも言われた

私が力つきると好き放題いたぶって去って行つた

殺されると思つたけど、苦しくてもがく中で

どうにか助かりたいと思つた

でも、恐怖と心の傷がこんなにもつきまとうなら
いつそ殺してくれればよかったのに

犯人が捕まっても私の失われた時間は戻らない

警察、検察でその時のこと、何度も何度も聞かれて

また思い出して、気持ち悪くなって、苦しくて

なんで犯人を罰するために、

私がこんな苦しい想いをしなければならいんだろう

二度目の被害の犯人はいまも捕まっていない

普通になにもなかったかのように暮らしていて

また違う誰かを襲ってやろうとも思っているのだろうか

家も外も完全に安全とは思えず

どうしようもなく苦しい日がたくさん

大好きだったスカート、はけなくなった

長くふわふわにしたい髪、伸ばすのが怖くなった

夜道を歩くと胸が圧迫されるような息苦しい感じがあつて

後ろも気になって、外を歩くのが怖くなった

男性がたくさんいるところでムカムカするようになった
イヤフォンがはめられなくなった

どこにいても物音に敏感になった

似たようなニュースをみるとどうしようもなく苦しくなった
PTSDで働けなくなった

海外留学もするはずだったのに

昔の私はいなくなってしまうて、今の私を愛してあげようと
必死に生きている

だけど時々昔の自分に会いたくなる

それでも、それでも、卑屈にはならず
光を見つけて、いつか

助かってよかった、生きていてよかったって思えるように
頑張って明日も生きよう

だってだって、私はきつと悪くない
なにも悪い事していない

それだけは苦しくても胸を張っていよう



イラスト 泉 牧子

会員にと
なる
お得

●入院見舞金等制度

●協賛店制度



特典1 入院見舞金等制度

①適用の範囲

- ・交通事故の発生時に、運転又は同乗中でシートベルトを装着しているとき
- ・自動二輪車又は原付車の乗車時で、乗車用ヘルメットを着用しているとき

②対象となる事故

- ・発生した交通事故が原因で、30日以上継続入院した場合
- ・ 〃 60日以内に死亡した場合

③支払制限

飲酒運転や過労運転等の場合は、対象外です。

④見舞金等の額

入院見舞金は3万円、死亡弔慰金は5万円

⑤請求手続き

秋田地区交通安全協会に申請願います。

⑥請求の期限

その権利が発生したときから90日以内に申請手続きをお願いします。



特典2 協賛店制度



①概要

交通安全協会の活動に理解と協力が得られる協賛店を募集し、会員がその協賛店の取扱商品等の優待特典や割引サービスを受けることができる制度を平成28年4月から開始しております。

②利用方法

会員証を提示することによって、全県200以上の事業所、商店等から各種サービスを受けることができます。なお、会員証のほかに本人確認のために免許証提示を求められることもありますので、よろしくお願いいたします。

協会では随時、協賛店を募集しておりますので、店舗数等は変動いたします。

③当協会管内の協賛店（五十音順）

秋田県健康増進交流センター／アキタパークホテル／
江川印章／お菓子の郷ジロー／岡部時計店／(株)まるごと市場／(株)ノ関時計店／(株)高尾自動車整備工場／(株)トヨタレンタリース秋田／(株)花徳／(株)松本カーコーポレーション／時計メガネのコバヤシ／はんこ屋さん21
秋田けやき通り店／プリチストンリテールジャパン(株)北日本支社／ふるさと温泉「ユアシス」／ホテルエクセルキクスイ／メガネのゴトウ／(有)平野自動車／(有)米塚自動車／雄和観光交流館「ヴィラ・フローラ」／雄和サイクリングターミナル／リフレッグ「香音」

④お願い

各協賛店の特典内容につきましては、『秋田県交通安全協会』のホームページをご覧ください。



交通安全活動に ご理解とご協力を

交通安全協会に入会をお願いします

皆様からの会費は次のような事業に使われます。

交通安全活動



当協会には32の支部があります。

支部の方は、日々の園児・小学生に対する交差点での誘導、自転車利用者に対する声掛けや各季の交通安全運動などにおける各種啓発活動を実施しており、協会ではこれら地域の交通事故防止活動に対する支援を行っています。

各種の表彰



安全運転に努められた会員の表彰を行っています。

広報啓発活動



立て看板、のぼり旗の掲出、チラシの配布、新聞などを通じた広報を行っています。

子供自転車大会への出場



「交通安全教育は、人格や行動習性の形成時期に行うのが最も効果がある」と言われることから、その教育効果を一層高めるため小学生を対象とした大会への出場に対して支援しております。

免許更新関係

免許更新時に会員になった方に対し免許証ケース・反射材などを配布しております（秋田県交通安全協会）。

会費は次のとおりです

1年500円で免許有効期間分

3年 1,500円

5年 2,500円

会員登録

会員になられた方の住所、氏名などの個人情報情報はコンピュータに登録のうえ適正に管理し、優良運転者の表彰など会員サービスのみに活用させていただいています。

秋田地区交通安全協会

〒010-0061 秋田市卸町3-6-3 秋田卸センター内
TEL 018-862-0440 FAX 018-838-5015

犯罪被害者等の手記 第4集

平成30年11月

- 〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号
秋田県生活環境部県民生活課
- 〒010-0951 秋田市山王四丁目1番5号
秋田県警察本部警務部警務課
- 〒010-0922 秋田市旭北栄町1番5号
公益社団法人 秋田被害者支援センター
- 〒010-0061 秋田市卸町三丁目6番3号
秋田地区交通安全協会

この冊子は秋田地区交通安全協会の助成により作成しました。